

經典餘師

近思錄

四

口 11
1029
42



存養の類凡七十條

或問聖學可乎濂溪先生の曰可也
要有乎曰有請問焉曰一と要爲一
とハ無欲也無欲
あるべし静ふて虚
動て直静ふて虚
あるべし則通ひ動
て直あるべし則公
あり公あるべし則

近思錄餘師卷之四

存養類凡七十條

存養といふ心ふところをてめ
ふいそつとていふ何程學

問て理義を知るとき我はこり留てやいふ心を智慧も
暗て行ふと固ふべ此類七十箇條ををめとちり

或問聖可學乎濂溪先生曰可有要

乎曰有請問焉曰一爲要一者無欲

也無欲則靜虚動直靜虚則明明則

通動直則公公則溥明通公溥庶矣

乎或の問は聖人ハ凡人より稱へ中く學ぶものなり稱へ
ども若も學なる可ものなり先生の曰學ぶものなり

或もこつ其義請問と先生いふそれ心を專一とせんと

溥明通公溥ハ庶
矣乎

伊川先生の曰陽
始て生ずるといふ
甚微なり安靜は
後能長を
故は復之象
先王至日
以て閑と閑
息節宣は以生
と養ふなり飲食
衣服は以て形と

肝要の事一はとるは無欲なり心無欲して利は迷つべ
閑静なり居るといふ少の忘念なく心虚なり動作を爲
したる物は撓なく行直あり静なり虚あり我心明なり
心明あり智慧生て衆理は通達なり動く直ありを
私己の行する萬事公道あり公道あり天下の事はお
ろく廣博ありする次第なり聖人の處は庶くなく
○伊川先生曰陽始生甚微安靜而
後能長故復之象曰先王以至日閉關
冬至は陽氣初て生し甚微なり安て静なりこととや
とて次第は生長なり人の心を治するも同じとあり善
と爲は志し少し兆するといふ能なりとて後には盛なり
りのあり故は復の卦の象は云昔乃明王は冬至乃日
閑と閑る天と人の動息節宜に養生也飲
氣とやういふもの
食衣服以養形也威儀行義以養德

養也威儀行義
以徳と養也己と
推し物も及ば
人と養ふ

言げんご語ごと慎しん以もつて其その
 德とくと養やうひ飲いん食しきと
 節せつして以もつ其その體たいと
 養やうふ事こと之の至いた近ぢかと
 して繫けず所ところ至いた大だいふ
 る者もの言げんご語ご飲いん食しき於こゝ
 過まぎるハ莫なう

震百里と驚せど
もヒ鬢と喪不大
震懼は臨能安而

經典餘帀

正思錄卷之四

也推已及物以養人也 動とい身と働息とい身と休め即とい

身の程をふ宣とい氣と舒となり此人養生の第一
飲食衣服の人乃形をやりし威儀と行の義ハ我ガ
徳と養ふなり我身と推量アそ
物事又及びとい人をやりしなり

○慎言語以

養其徳節飲食以養其體事之至近

而所繫至大者莫過於言語飲食也

我ガ口より言ひ出をとよくつゝ鹿漏とい我ガ
心乃徳とやりし朝夕乃飲食又分量して我ガ身を
やりし是の月手近乃事るれども繫とれところ
甚とい大ひある此乃言語飲食乃二又過とい

○震驚百里不喪匕鬯臨大震懼能

安而不自失者唯誠敬而已此處震

自失（い）之不者（ふ）ハ唯（た）誠敬而已此處震之道也

人之其止（し）ハ安人（あ）能（の）不（し）所以（ゆ）ハ欲前於牽而其止（し）也故良之道（し）ハ其背（し）ハ良（の）當見所前（し）ハ在（て）背（し）ハ乃之（し）ハ背（し）ハ見不（し）所也見不（し）所於止（し）也則欲以其心

之道也（し）震（し）ハ雷鳴（し）ハ先祖（し）ハ他の神（し）ハ祭（し）や神酒（し）ハ雷鳴（し）ハ能（の）取落（し）ハ易（し）ハ震（し）ハ卦（し）ハ懼（し）落（し）ハ心（し）ハ祭（し）ハ大（し）ハ難（し）ハ逢（し）ハ操（し）ハ失（し）ハ此（し）君子（し）ハ大（し）ハ難（し）ハ逢（し）ハ操（し）ハ失（し）ハ此（し）

○人之所以不能安其止者動於欲也欲牽於前而求其止不可得也故良之道當良其背所見者在前面而背乃背之是所不見也止於所不見則無欲以亂其心而止乃安（し）人（し）ハ善道（し）ハ種（し）ハ欲（し）ハ心動（し）ハ目（し）ハ前（し）ハ欲（し）ハ牽（し）ハ善道（し）ハ種（し）ハ欲（し）ハ心動（し）ハ目（し）ハ前（し）ハ欲（し）ハ牽（し）

と乱無（し）而止（し）ること則安（し）

其身（し）ハ獲不（し）ハ

其身（し）ハ見不（し）ハ

我（し）ハ忘（し）ハ謂也

我（し）ハ無（し）ハ則止（し）矣

我（し）ハ無（し）ハ不（し）ハ止可

之道無（し）

其庭（し）ハ行其人（し）ハ

見不（し）庭除（し）の間至

近也背（し）ハ在（て）ハ則

至近（し）ハ雖見不（し）物

於交不（し）謂也

外物接不（し）欲萌

道（し）ハ背（し）ハ目（し）ハ前（し）ハ牽（し）ハ止（し）不（し）獲其

身不見其身也謂忘我也無我則止

矣不能無我無可止之道（し）其身（し）ハ獲不（し）ハ

目（し）ハ背（し）ハ我（し）ハ身（し）ハ忘（し）ハ事（し）ハ身（し）ハ乃

欲（し）ハ事（し）ハ行其庭不見其人庭除

之間至近也在背則雖至近不見謂

不交於物也（し）人（し）ハ庭（し）ハ行（し）ハ先方（し）ハ人（し）ハ見（し）ハ庭

我（し）ハ目（し）ハ物（し）ハ交（し）ハ見（し）ハ外物不交

不是如而止止乃止止乃得之道也
止於此而為也
明道先生の曰若
存養する能は
只是說話

聖賢千言萬語
只是人の已己放
之心と將之と約
反復して身
入來らんと欲
自ら能尋て上
向ひ去下學而

内欲不萌如是而止乃得止之道也
於止為无咎也
目の前前の心は接接を内
淫欲淫の念念萌萌ふか
乃乃お

曰若不能存養只是說話
學者學者の心は
道理と弁弁へる
明道先生

○聖賢千言萬語只是欲人將已放
之心約之反復入身來自能尋向上
去下學而上達也
聖人賢者の心は
残さず事ハ人の利欲
を

逃ひて外へ放い
とふこと事ハ
學者聖賢乃言
從ふ

上達せん也

李顥問常事
遇毎即能操存
之意と知事無時
如何存養得
熟む曰古之人耳
之樂於目之禮
於左右起居盤
盂几杖銘有戒有
動息皆養所有今
皆此と發獨理
義之心と養有耳
但此涵養の意を
存する久れば
則ち自ら熟矣

次第くは進上達
○李顥問每常遇事即

能知操存之意無事時如何存養得
熟曰古之人耳之於樂目之於禮左
右起居盤盂几杖有銘有戒動息皆
有所養今皆廢此獨有理義之養心
耳但存此涵養意久則自熟矣敬以
直内是涵養意
程子の門人李顥程子に
りて常事の
事
左も右も起居より盤盂几杖の
銘戒有

故以內直是涵養之意なり

呂與叔嘗言思慮多則心驅除不能不患曰此正如破屋中御寇東

面一人來未遂得西面又一人至矣左右前後驅逐不暇蓋其四面空疎入水水自然入若以一器實之以水置之水中水何能入來蓋中有主則

動息心氣をつくる工夫を夫れは事無時心と取故をこふ今時此事は廢るるも只理義の心と養ふの残るるのこ此処は心を涵養へ時久しうて自然仕遂るるを敬とてつゝやの理とて心乃内と直ふ意なり

○呂與叔嘗言思慮多不能驅除曰此正如破屋中御寇東面一人來未遂得西面又一人至矣左右前後驅逐不暇蓋其四面空疎盜固易入無緣作得主定又如虛器入水水自然入若以一器實之以水置之水中水何能入來蓋中有主則

緣無又虛器水入如水自然入

實實則外患不能入自然無事

叔嘗

若一器以之實之水中以水何能入來蓋中主有則實實則外患不能入自然無事

實實則外患不能入自然無事
叔嘗言吾曹常須愛養精力精力稍不足則倦所臨事皆勉強而無誠意接賓客語言尚可見况臨大事乎

接する語言尚見る可況大事は臨乎

明道先生の曰學者

全此心と射せし學

未盡は雖事物の

來若き應不可不但

分限は隨ひ之應

せの中不と雖遠う

ら不矣

居處恭事と執敬

人と忠此は是徹

上徹下の語聖人

元二語無

伊川先生の曰學

者須く此心と敬守

まじ急迫す可不

當栽培深厚うて

其間涵泳す

然後以自得も可

但急迫は之を求む

只是私已終は道

達するも不足不

明道先生の曰く思

邪無敬せ不母只

此二句循る之を

行ふ安ぞ差有を

得差有者ハ不敬

不正は由也

經典餘師

吾曹も常々精カと大切な養育一精カとの時ハ倦るものゝ物事と爲る強は骨折の心よりなる誠の意ふれし客に應對する語言の中ハ○明退屈の様あるて知るべし況大切なりことをや

道先生曰學者全體此心學雖未盡

若事物之來不可不應但隨分限應

之雖不中不遠矣

學者ハ我心と射せし學問とて遂なるも事乃らるる應はるる分限と量てそのことと

居處恭執事敬與人忠此是徹上徹

下語聖人元無二語

安閑して宅にありしと執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

と執行とて大切な敬ハ他人と交するハ我心と盡して忠

近思錄卷之四

五

故○今學者敬而不自得又不安者
只是心生
亦是太以敬來做事得重此
恭而無禮則勞也恭者私爲恭之恭
也禮者非體之禮是自然底道理也
只恭而不爲自然底道理故不自在
也須是恭而安
禮の節とあるゆゑに我身苦勞するなり此の恭は私の
恭にて無理あり礼といふは言語應對揖讓進退なり
乃礼といふは心身の上よりいふべし自然は天の理
なり礼あり恭あり自然の理はあり處を

端言語必正者非是道獨善其身要
 人道如何只是天理合如此本無私
 意只是箇循理而已
 身と善せんとはさるばくは、人より何れ右のてく
 さるごとく、人のさるごとく天の道理より私に取こ
 うくさるふく、只道理よま
 こころを肝要とせざるあや
 而心不安樂者何也此則正是剩一
 箇助之長雖則心操之則存捨之則
 亡然而持之太甚便是必有事焉而

而之これら持もる大甚おそろひ一
 ければ便すまひ是これ必かならず更また有あり
 焉こゝ而こゝ之こゝ正ただす也なり
 亦また須もとく且かつ慙なげ去さべし

此如き者へ只是德
孤德孤ふ不必隣
有德盛あふふ到
後自々々空礙無左
右其原は逢也

敬而失無便是喜怒
哀樂の未發なる之と
中と謂之敬中と謂可
不但敬而失す無即
中ある所以也

正之也亦須恁去

今義理^{いまぎ}と志^{こころ}とせうとつゝ
心安樂^{しんあんらく}ふぬ何ゆゑぞや

こと無理は我が心を生育にとまらぬ心は掃へとも
まり捨てるに過ぎぬものなり持てるは是非あり
事と成就うんと正てまらんと同
とあるまらざる如くなり
如此者只是德

孤德不孤ニ必有ス鄰ニ到リ德盛ニ後ニ自ラ無ニ室

礙左右逢其原也

かゝるあるは我が徳せし
物よりさして徳ハ孤る

ぬのれうて廣く通じて家と隣との如きゆへに徳盛なる
いふも自然に窒礙なく左右とあるも其原の理は違ふ
もの
敬而無失便是喜怒哀樂未發
る

謂之中敬不可謂中但敬而無失卽

所以中也

心を靜て敬ひてとて失ふぬおもふを
おもふを喜怒哀樂にととの表へ

司馬子微嘗て坐忘論と作是謂牙
坐馳也

子徽嘗作坐忘論是所謂坐馳也

 發ぬ前乃中といふのく敬の義を中といひ
 敬て心をとると失ひぬを中といふは
 司馬

子徽の坐忘論を作すの静は坐して物欲を忘まんとのことなれば久しく強よあさるゝあまは坐て馳やうるものこと

柱以意數之已尚不疑再數之不合

不免令一人一聲言數之乃與初數

者無差則知越著心把捉越不定

むろ長安の倉中よりて開き坐せし時長廊の柱と見
てころと数ちぐひを思ひしは二度うごへまば初と合ひ
人より聲とわげてうごへさすれば初とわくまどめあは
自然の心あるゆへにうごへし二度の時ハ心を着過る故

定さだままららずず不ふとと

人心主と作定まゝ
不正一箇乃翻車
流轉動揺て須臾
の停まる無如一
箇の主と做不若
怎生奈何張天祺
音嘗て言自約す
數年牀上着て
自便ら事と思量
すゝゝと得不變と思
量せ不後須く他這
心と把来制縛とて
亦須寄寓して一箇
の形象は在べ皆

ちぐさくへそれより知る萬事
ころを著越ぬまへうつく定ゆるり
○人心作

主不定正如一箇翻車流轉動搖無
須更停所感萬端若不倣一箇主怎
生奈何張天祺昔嘗言自約數年自
上著牀便不得思量事不思量事後
須強把他這心來制縛亦須寄寓在
一箇形象皆非自然君實自謂吾得
術矣只管念箇中字此又爲中所繫
縛且中亦何形象

人の心ごまの事車の
廻ごまの事

人の心ごとまゝぬ事車乃
廻るゝゝゝゝの事

自然は非君實自
謂吾術と得矣只
管箇中の字と念
此又中一爲は繫縛
せ所且中ハ亦何乃
形象ぞ

人有胃中常兩入
有若焉善と爲んと
欲されば惡有て以
之之間と爲如く不善
と爲と欲されども又
羞惡之心有が如く
者へ本二人無此正
交戰之驗也其志と
持氣亂能不使此

心うごくるの心の主といふれあはれ定まらば張天
 棋が自身と心と取あはるること數年牀上は坐せしとて物
 ごとく思案せしむる其後心をひきよめし一つの形あ
 るもの中へ入るありしは自然の理なりしに無理あ
 る事也又司馬君實のつく吾極を得しは一箇の中
 乃字とてろろげくと是れ中のである縛らるるあまじ
 そのうち中といふもの有人胷中常若有兩人
 といふ形あるなり
 焉欲爲善如有惡以爲之間欲爲不
 善又若有羞惡之心者本無二人此
 正交戰之驗也持其志使氣不能亂
 此大可驗要之聖賢必不害心疾
 の中は常は兩箇の人のありあはれ一人善とせんとせられ一人
 こゝろとせられ一人不善とせんとせられ一人乃

の中うちは常じょうに兩箇りやうかんの人ひとのりるべく一人善ぜんとせんとされば一人
こゝとせぬが一人不善ふぜんとせんとせぬが一人乃

大驗す可之を要
心疾害せられ不

明道先生曰某字
寫時甚敬是
字一好と要まふ
非只此は是學

伊川先生曰聖人
事と記せ不所以
常と記得今人
事と忘る其事
記とて以てあり
事と記する能不
事と處する精

の恥やうと制する心は二人へあつた善惡の念定
まへに胸中にて戰ふるものと定むるものと持て
失つたものと氣の乱るもの用心を分る
さうと驗つてつる処に聖人の心の疾は妨げらるる

○明道先生曰某寫字時甚敬非是
要字好只此是學
吾字と寫る甚敬とて
書る是は文字の能る

○伊川先生曰聖人
不記事所以常記得今人忘事以其
記事不能記事處事不精皆出養之

不完固
聖人の事と記し忘るる今人事と忘るる記し忘るる
強はさるる心と記し忘るる今人事と忘るる記し忘るる

○明道先生在澶州日修橋
少一長梁曾博求之民間後因出入

見林木之佳者必起計度之心因設
戒學者心不可有一事
明道先生澶州と

橋と修る一木の長と梁とつて林木は民間へ
博求するの心と其後官署へ出入する林木は

○伊川先生曰入道
莫如敬未有能致知而不在敬者
道

人むと敬は増るのほが理と知
今人主心不

心之視之冠賊の如く
而制可不是事
累乃心之累
當知天下物
是得之必者無
惡可不也

人只一箇天理有
却得存得能
不更甚の人を
做ん也

人思慮多くて自
寧る能ふ只是
他の心主一定
不做得心主一定
と作得と要せば惟

是事於止人君
爲仁於止之類
舜之四凶を誅
する如く四凶を
誅する如く四凶を
誅する如く四凶を
誅する如く四凶を

人事於止不只是
他の事と攬物
て各物に付使
不ば物各物に付
則是物と役物
爲は役せしめ
物に役せしめ
必ば則有須く是

定視心如冠賊而不可制不是事累
心乃是心累事當知天下無一物是
合少得者不可惡也

○人只有一箇天理却不
能存得更做甚人也

○人多思慮不能自寧
只是做他心主不定要作得心主定

惟是止於事爲人君止於仁之類如

舜之誅四凶四凶已作惡舜從而誅

之舜何與焉

人不止於事只是攬他事不

能使物各付物物各付物則是役物

爲物所役則是役於物有物有則須

是止於事

事於止すべし

人々動以能不_レ只是誠至不_レ事_二於_一厭倦_二事_二皆_一是誠無處_二

静_二而後萬物自_一然_二皆春意有_一を見る

孔子仁_二言只說門_一を出て大賓と見_二如く民_一と使ふこと大祭_二承る如_一其氣象_二見_一便須_二心廣_一體胖_二動容周旋_一礼_二中_一自然

あ_二下_一惟獨_二慎_一守_二之法_一も

聖人_二已_一以脩_二以_一敬_二以_一百姓_二安_一篤恭_二而天下_一平_二惟_一上下_二恭敬_一於_二一_レ位_二萬物自_一育_二氣和_一せ不_レ無_二四靈_一何_二至_一ら不_レ有_二人_一此_二信_一体_二順_一達_二道_一る

○不_二心_一物_二役_一する_二物事_一の法則_二○

能動人只是誠不至於事厭倦皆是

無誠處_二人_一感動_二する_一物事_二厭倦_一心_二生_一る

○静而後見萬物自然皆有

春意_二我_一心_二を_一静_二め_一見_二る_一萬_二物_一自然_二活_一潑_二と_一

○孔子言仁只說出門如見大賓

使民如承大祭看其氣象便須心廣

體胖動容周旋中禮自然惟慎獨便

是守之之法_二孔子_一仁_二の_一道_二と_一説_二る_一我_二が_一門_二を_一出_二て_一人_二と_一接_二る_一大_二切_一の_二客_一と_二り_一

如_二く_一民_二を_一治_二り_一使_二る_一大_二事_一乃_二祭_一承_二る_一敬_二を_一第_二一_一孔子_二の_一言_二と_一其_二氣_一象_二を_一見_二る_一心_二廣_一く_二少_一く_二隱_一微_二と_一無_二体_一胖_二と_一聊_二と_一礼_二儀_一と_二り_一事_二と_一動_二容_一周_二旋_一天_二理_一の_二礼_一中_二自然_一なる_二べ_一く_二我_一心_二の_一内_二人_一の_二知_一ぬ_二の_一道_二と_一守_二る_一法_二と_一○聖

人脩已以敬以安百姓篤恭而天下

平惟上下一於恭敬則天地自位萬

物自育氣無不和四靈何有不至此

體信達順之道_二聖人_一我_二身_一の_二う_一を_二治_一る_二天下_一の_二百姓_一を_二敬_一を_二第_一一_二と_一天下_二の_一百姓_二を_一

安_二ら_一る_二治_一る_二篤_一實_二恭_一敬_二を_一第_二一_二と_一天下_二の_一百姓_二を_一

太_二平_一る_二上_一天_二と_一下_二の_一萬_二民_一と_二り_一事_二と_一動_二容_一周_二旋_一天_二理_一の_二礼_一中_二自然_一なる_二べ_一く_二我_一心_二の_一内_二人_一の_二知_一ぬ_二の_一道_二と_一守_二る_一法_二と_一○聖

五穀_二鳥_一獸_二と_一至_二る_一處_二を_一得_二て_一萬_二物_一自然_二に_一育_二ら_一る

聰明啟知是由出
是々以天事帝
を饗食と

存養熟後泰然
行將去便有

屋漏則心不安而體舒

心腔子の裏に在るを要せよ

只外面些の隙罅に便走り了

人心常は活せん

要するべし則ち周流窮乏無一隅に滞る

明道先生曰天地位を設而易其中乎

行は只是敬也敬則間斷無

敬せ不母以て上帝と對越可

敬百邪は勝

敬以內と直に義以外を方とする仁也

經典餘師

陰陽の氣運和ふとく麟鳳龜龍の四靈至るぬ

聰明啟知由是出以是事天饗帝

敬の道は專らふて靜あふ物に昏るべし聰明

進存養熟後泰然行將去便有

屋漏則心安而體舒我が家の隅人ふく處

心要在腔子裏我心を腔子の

些隙罅便走了欲の隙罅に走り了

人心常要活則周流無窮而

不滯於一隅心常は存して生活を要する左

明道先生曰天地設

位而易行乎其中只是敬也敬則無

間斷天地の氣通して移り易く限る此

敬の間斷なく天地と同躰なる

不敬可以對越上帝心は不敬を事と

敬勝百邪打勝てさふ百の邪念

敬以直内義以外仁也敬いと

若敬以て内直
くせば則便直
矣必事有焉而
正まる勿き則ち
直也

吾一と涵養せよ

子川上在て曰く逝
者斯の如く夫晝
夜と舍不漢自以
來の儒者皆此義
と識不此聖人之心
純亦已不と見也
純亦已不天德也

天德有て便王道
を語可其要只
獨を慎は在

躬と有不利する攸
無已と立不る
後好事は向て雖
猶物と化し得不天
下萬物を以て已
了は當は天下萬物
を得べし

心の内を直し義をおさる心乃外を方 若以敬
まこと邪念私欲の事なく仁乃道なり
直内則便不直矣必有事焉而勿正
則直也 敬は心乃内と直は事なるものなり敬を以
て強し直しんとせんとせば偏倚て直ならずべ
くある事なり心なる事を仕當むるあり
○

涵養吾一 吾が専らある心を ○ 子在川上

曰逝者如斯夫不舍晝夜自漢以來
儒者皆不識此義此見聖人之心純
亦不已也純亦不已天德也有天德
便可語王道其要只在慎獨 孔子川上

流きを見く天道乃移り易るものなり此間断ある
此水の晝夜の分るる流る如く此の如く此の漢
聖人の心純一なりことなり此の曲の説多し此ハ
よく天道乃流行と同じた處とまづべし純一なる
已とあるは天の徳なるものなり天の徳は王道の
正しき語なりその心その肝要とする ○ 不有
とあり我心のむくするは慎むるに在る

躬無攸利不立已後雖向好事猶爲
化物不得以天下萬物撓已已立後
自能了當得天下萬物 蒙の文は辭よりが
利することあり我と吾心を立ざるものなり心立され
る善事と向く物も吾は從ひ化さるるなり
くつて天下萬物は我が身と撓され苦むけくあり
我が心ありと立ば一点の利欲なく天下萬物の自由

伊川先生の曰學者心慮紛乱と寧靜とを不能と患此則天下の公病と學者ハ只箇心と立んと要せし此上頭とを盡商量有

邪よと閑ふせげば則すなはち誠まこと自みづか
 存ぞんきこれぞめん是これ外面がめんより一いつ
 箇この誠せい捉とつ将来しやうらいリ
 存ぞん着ちやくきぞんるちやく不ふ今いま
 人ひと外面がめん不ふ善ぜん於お
 役やく々々不ふ善ぜんの
 中うち於おて箇こ善ぜん尋たづ
 来き存ぞん着ちやく此この如ごと

ハ則ち豈善人之理
有人只是邪よこしまと閑ひま
則誠自存まことよりあると存ぞんと
故孟子性善言
皆内由出みなうちででると只誠
便存たやすくあると爲な邪よこしま
を閑更また甚こゝろの工
夫と着人但惟是
容貌と動うご思慮
を整ととのふ則自然しぜと
敬けいと生なまと
敬ハ只是ただこれ主しゅと
也一と主しゅとすれば則
既すで東之不又西
之不是ちがひ如ごとく則ち

伊川先生曰學者患心慮紛
 亂不能寧靜此則天下公病學者只
 要立箇心此上頭儘有商量學者の思慮紛乱て
 寧靜ぬを患とる人こそ天下に統いつこの病やまひありて夫ゆへ
 心を立るを要とて家を造る小基跡こきあとを第一はつとる
 おとこ心こころよく立たべその上頭
 〇閑邪則誠けんじあつしやう自存みづかひ
 〇商あやま量りやうあるふ那なて

不是外面捉一箇誠將來存著今人
外面役役於不善於不善中尋箇善
來存著如此則豈有入善之理只是
閑邪則誠自存邪欲の念を防閑てよせはま
秘を誠乃心存心の外又一ツ

の誠ありて取来り我心へいゝとていゝなり。今の人
 うとていゝなり。されどもいゝをいゝ。其中より善をいゝ
 出。我心に入んといふ。かくの如き善は入る理あり
 只邪念を防閑せしむべし。誠自然に我心は存するべし
 故孟子言性善皆由内出只爲誠便
 存閑邪更著甚工夫但惟是動容貌
 整思慮則自然生敬。善たるを善へいゝ。我々
 心乃中より出るといふ。誠を心は存せば心主なり
 意を正しく思慮の整ひ乱まぬ
 心得れば自然に敬生ずるなり。敬只是主一
 也主一則既不之東又不之西如是
 則只是中既不之此又不之彼如是

則只是內存此則自然天理明學者
須是將敬以直內涵養此意直內是
本敬と一心を專一はまると主といふ專一敬と一心を專一はまると主といふ敬敬と一心を專一はまると主といふ心敬と一心を專一はまると主といふ定敬と一心を專一はまると主といふ中敬と一心を專一はまると主といふ東敬と一心を專一はまると主といふ西敬と一心を專一はまると主といふ走敬と一心を專一はまると主といふ迷敬と一心を專一はまると主といふ是敬と一心を專一はまると主といふ中敬と一心を專一はまると主といふと敬と一心を專一はまると主といふふ敬と一心を專一はまると主といふま敬と一心を專一はまると主といふく敬と一心を專一はまると主といふ
事敬と一心を專一はまると主といふを敬と一心を專一はまると主といふふ敬と一心を專一はまると主といふま敬と一心を專一はまると主といふま敬と一心を專一はまると主といふ心敬と一心を專一はまると主といふ彼敬と一心を專一はまると主といふ此敬と一心を專一はまると主といふは敬と一心を專一はまると主といふ滯敬と一心を專一はまると主といふつ敬と一心を專一はまると主といふべ敬と一心を專一はまると主といふ是敬と一心を專一はまると主といふ心敬と一心を專一はまると主といふ常敬と一心を專一はまると主といふは敬と一心を專一はまると主といふ内敬と一心を專一はまると主といふは敬と一心を專一はまると主といふ存敬と一心を專一はまると主といふと敬と一心を專一はまると主といふふ敬と一心を專一はまると主といふ
ま敬と一心を專一はまると主といふう敬と一心を專一はまると主といふの敬と一心を專一はまると主といふお敬と一心を專一はまると主といふも敬と一心を專一はまると主といふと敬と一心を專一はまると主といふい敬と一心を專一はまると主といふは敬と一心を專一はまると主といふ自敬と一心を專一はまると主といふ然敬と一心を專一はまると主といふは敬と一心を專一はまると主といふ天敬と一心を專一はまると主といふ乃敬と一心を專一はまると主といふ理敬と一心を專一はまると主といふは敬と一心を專一はまると主といふ明敬と一心を專一はまると主といふら敬と一心を專一はまると主といふう敬と一心を專一はまると主といふな敬と一心を專一はまると主といふき敬と一心を專一はまると主といふ學敬と一心を專一はまると主といふ者敬と一心を專一はまると主といふ
專敬と一心を專一はまると主といふ一敬と一心を專一はまると主といふは敬と一心を專一はまると主といふ敬敬と一心を專一はまると主といふを敬と一心を專一はまると主といふふ敬と一心を專一はまると主といふ心敬と一心を專一はまると主といふの敬と一心を專一はまると主といふ内敬と一心を專一はまると主といふを敬と一心を專一はまると主といふ直敬と一心を專一はまると主といふす敬と一心を專一はまると主といふ此敬と一心を專一はまると主といふ心敬と一心を專一はまると主といふを敬と一心を專一はまると主といふ涵敬と一心を專一はまると主といふ養敬と一心を專一はまると主といふち敬と一心を專一はまると主といふふ敬と一心を專一はまると主といふ
虚敬と一心を專一はまると主といふ一敬と一心を專一はまると主といふ内敬と一心を專一はまると主といふを敬と一心を專一はまると主といふ直敬と一心を專一はまると主といふま敬と一心を專一はまると主といふも敬と一心を專一はまると主といふと敬と一心を專一はまると主といふい敬と一心を專一はまると主といふは敬と一心を專一はまると主といふ學敬と一心を專一はまると主といふ問敬と一心を專一はまると主といふ義敬と一心を專一はまると主といふ理敬と一心を專一はまると主といふを敬と一心を專一はまると主といふ知敬と一心を專一はまると主といふの敬と一心を專一はまると主といふ本敬と一心を專一はまると主といふく敬と一心を專一はまると主といふ
閑邪則固一矣然主一則不消言閑
邪邪念を閑邪邪念を閑念邪念を閑を邪念を閑閑邪念を閑ざ邪念を閑と邪念を閑い邪念を閑ひ邪念を閑ま邪念を閑ば邪念を閑心邪念を閑の邪念を閑ち邪念を閑や邪念を閑う邪念を閑一邪念を閑は邪念を閑あ邪念を閑る邪念を閑ち邪念を閑う邪念を閑こ邪念を閑
あ邪念を閑の邪念を閑づ邪念を閑と邪念を閑微邪念を閑
う邪念を閑せる邪念を閑ち邪念を閑う邪念を閑も邪念を閑
有以一爲難見不可下工夫
如何一者無他只是整齊嚴肅則心

便一則自是無非僻之干此意但
涵養久之則天理自然明
その一といふもの
目よりええうき
そのゆゑ工夫の付ゆくはいつくかまゝ思ふもの
一と他が一思慮を整齊く乱るゝ客兒を嚴肅
あつて台意とぞこころをべ心一なるを一と
非僻の事

天の理も自然と我々
心よりあきらむる如く
所寓曰操則存舍則亡出入無時莫
知其鄉更怎生尋所寓只是有操而
已操之之道敬以直内也
心乃物之感也
處よりくるものあるありと心は操は存す
つゞき消亡するものより出るも入るも定まることあり

内と直す

敬と則自
虚静虚静と把
喚で敬と做可不

學者の先務固
志は在然に聞見
知志と屏去ん
謂有則則是聖
と絶智と棄思慮
と屏去ん
有て其紛乱と患
則須く坐禪入定
と一萬物畢く照
か如く是鏡之常之

と使照さ
爲難一人
又感せ不能
之と使思慮せ不
しむと爲難

若此と免む
せ惟是心主有
何と主と爲敬而
已矣主有則虚
虚へ邪入能ハ不
謂主無ハ則實
實ハ物来て之
奪と謂

この處より
操とる肝要
一實行は
敬則自虚静不可

把虚静喚做敬
心虚して静
敬と則自
虚静虚静と把
喚で敬と做可不

○學者先務固
有謂欲屏去聞見知思則是絶聖棄
智有欲屏去思慮患其紛亂則須坐
禪入定如明鑑在此萬物畢照是鑑
之常難爲使之不照人心不能不交
感萬物難爲使之不思慮
學者第一の務

心と志と
爲難一人
又感せ不能
之と使思慮せ不
しむと爲難
若欲免此惟是心
有主如何爲主敬而已矣有主則虚
虚謂邪不能入無主則實實謂物來
奪之
惟此の思慮の乱るを
つねに主を
つねに主を
つねに主を

若此と免む
せ惟是心主有
何と主と爲敬而
已矣主有則虚
虚へ邪入能ハ不
謂主無ハ則實
實ハ物来て之
奪と謂

大凡人心二用不可
不一事於用則
他事更入能不可
者事之為主尚
也事之主尚
思慮紛擾之患無
若敬於主之
焉此患有乎

謂所敬者主一之
敬謂所一者無
適之謂且主
一之義涵泳
則二三矣敢欺不

敢慢也尚屋
漏于愧不於至
皆是敬之事也
嚴威儼恪之敬之
道非但敬
致須此自入

舜華善之為未
物接之若如
何善之為只是
敬於主之便是
善之為也此以之
觀聖人之道是
嘿然言無非

實塞心之利
大凡人心不可二

用用於一事則他事更不能入者事

爲之主也事爲之主尚無慮紛擾之

患若主於敬又焉有此患乎

用也一之事用也他事更入能不可

乃紛擾之主一之義涵泳

之謂敬所謂一者無適之謂一旦欲

涵泳主一之義不一則二三矣至於

不敢欺不敢慢尚不愧于屋漏皆是

敬之事也

主一之義涵泳

陽人乃之敬

恪非敬之道但致敬須自此入

威儀儼恪

舜華善之為未

只是主於敬便是爲善也以此觀之

聖人之道不是但嘿然無言

勤善之爲也此以之

觀聖人之道是

曰中之時當耳聞無目見無否耳聞無目見無之理始得之得之在

賢且靜時如何曰謂之無物則不可然自有知覺處

曰既有知覺有却靜是動也怎生言靜人說復其

地之心也見之說皆以謂至靜能天地之心也見之非復之卦下面一畫便是動也安得謂之靜

或曰是動上於於靜求莫或否曰固然是然最難釋氏多定言聖人便止言人君止於仁於止人臣止於敬止於如之類是也易之

曰當中之時耳無聞目無見否曰雖耳無聞目無見然見聞之理在始得

賢且說靜時如何曰謂之無物則不可然自有知覺處

靜之時之說曰曰靜者心虛也物之知覺之然物之知覺之然物之知覺之然

知覺却是動也怎生言靜人說復其

見天地之心皆以謂至靜能見天地之心非也復之卦下面一畫便是動也安得謂之靜

或曰莫是於動上求靜否曰固是然最難釋氏多言定聖人便言止如為人君止於仁

為人臣止於敬之類是也易之艮言止之義曰艮其止止其所也人多不

止之義曰艮其止止其所也人多不

其止之義言曰其止是其所止也人多止能不一蓋人万物皆備事遇時各其心之重者因更互而出此一事重者見得便自出此一事重者見得便自出此一事重者見得便自出

或曰先生喜怒哀樂未發之前於

能止蓋人萬物皆備遇事時各因其心之所重者更互而出纔見得這事重便有這事出若能物各付物便自不出來也此義最難佛家之心定也此義最難佛家之心定也此義最難佛家之心定也

動字下靜字曰謂之靜則可然靜中須有物始得這裏便是難處學者且先敬會得若莫能敬則此知矣

動字下靜字曰謂之靜則可然靜中須有物始得這裏便是難處學者且先敬會得若莫能敬則此知矣何以用功曰莫若主一李明日

習能專一之時便
好思慮之事應
求之而不皆一
求之而要也

人夢寐之間於亦
以自家之學所淺
深之可夢寐顛
倒者如是即是心志
定而不操存固
不

問人心繫著之所
之事果善之夜夢
之見害不否曰
是善事也雖

應事皆要求一
曰一之主也外
心之

要者李明問曰
又他之吏麻之
如亂生之
心之專一也
思慮之事應
求之而要也
○人於夢寐間亦可以卜自

家所學之淺深如夢寐顛倒即是心

志不定操存不固
問人心繫著之所
之事果善之夜夢
之見害不否曰
是善事也雖

平日善也夢
之惡事也
操存之
問人心所繫著之事果善
夜夢見之莫不害否曰雖是善事心

亦是動凡事有兆朕入夢者却無害

捨此皆是妄動
人之心繫著事乃善也夢
之見害不否曰雖是善事心

人心須要定使他思時方思乃

是今人都由心曰心誰使之曰以心

使心則可人心自由便放去也
人之心取
定也

心誰之使曰心以
心使則可人心
心自由也便
放去也

其志持其氣
暴無内外交相

養心也

問辭氣と出すは是言語の上於て工夫と用や否曰須く是中半養て自然言語理順べし是言語を慎て妄を發不若此却力着可

先生釋は謂て曰吾氣と受甚薄二十而浸盛之四十五而後完今生七十二年矣其筋骨と校ふ盛年と於て損する

相養也

我志をあるとありとる利欲の念を我氣とやする外物に縦るを中守り

○問出辭氣莫是於

言語上用工夫否曰須是養乎中自

然言語順理若是慎言語不妄發此

却可著力

辭氣は出さし言語乃上工夫と用や語自然は理順べし言語をつつとみざる

○先生

謂釋曰吾受氣甚薄二十而浸盛四

十五而後完今生七十二年矣校

其筋骨於盛年無損也釋曰先生豈

以受氣之薄而厚為保生邪夫子默

然曰吾以忘生循欲為深耻

先生釋

吾氣が甚う十分なう今七十二年筋骨盛年

擲るこゝろと釋は先生氣分る手厚保生

忘る命もかゝる利欲の事は猶まよふを深し耻

とあり天乃理はまろぐ欲念あるは自然は健なり

○大率把捉不定皆是不仁

世の人大大率も心を

把捉さして天理も物欲も勝る

○伊川先生

日致知在所養養知莫過於寡欲二

字

知と致さんといふ心を養ふは在るべし養ひ

無也釋曰先生豈

氣と受之薄と以

而厚と生と保す

と為邪夫子默然

とて曰吾生を忘

欲は循て以て深と

耻と為也

大率把捉定らば

皆是不仁なり

伊川先生の曰知と

致は養所在知と

養は寡欲の二

字於過るは莫

字

知と致さんといふ心を養ふは在るべし養ひ

心定者其言重以舒不定者其言輕以疾

明道先生曰人有四百四病皆由自家則心須教由自家

謝顯道明道先生曰抹滿於從明道一日謂之曰爾輩

此在相從只是顯言語學故其學心口相應不盡若之行請問焉曰且靜坐

伊川人靜坐其善見每便其善學嘆

橫渠先生曰始學之要當三月違不日月至焉內外賓主之辨使知當心意使勉循而已能此者過幾幾我非在者非

○心定者其言重以舒不定者其言輕以疾

○明道先生曰人有四百四病皆不由自家則是心須教由自家

○謝顯道從明道先生於抹滿明道一日謂之曰爾輩在此相從只是學顯言語

故其學心口不相應盡若行之請問焉曰且靜坐伊川每見人靜坐便嘆

其善學謝顯道明道抹滿於從明道一日謂之曰爾輩在此相從只是學顯言語故其學心口不相應盡若行之請問焉曰且靜坐伊川每見人靜坐便嘆

○橫渠先生曰始學之要當知三月不違與日月至焉內外賓主之辨使心意勉勉循循而不能已過此幾非在我者

心清時少亂時常多其清時視
時視明聽聰四體羈束而待不
而自然恭謹其
此の如き何ぞ也
蓋心を用的に熟せ
に客慮多く而常
の心少也習俗之
心未去む而實心
未完なる也

○心清時少亂時常多其清時視
明聽聰四體不待羈束而自然恭謹
其亂時反是如此何也蓋用心未熟
客慮多而常心少也習俗之心未去
而實心未完也
心物は漆む清なる
少く思慮する
多し清なる
目は視るところ明ら
耳は聞るところ聰し
手足は用ひるところ
自然の物に接する
恭謹の心は耳目
手足の主なる心
乃きよは四体自然
正しく用ひたる未
熟なる客慮は常
心なる也

人又剛を得こと
要せよ太柔なれば
則立不於入亦人
生て喜怒無者有
則又剛を得と要せ
よ剛なれば則守得
定て回不道に進
勇敢に載へ則他
人より比すれば自
勇の處多し
戲謔惟事と害す
るものなり不志
氣の爲は流所戲
謔せ不亦是氣と
持する之一端也

習俗の心は實
心完なるゆゑなり
○人又要得剛太
柔則入於不立亦有人生無喜怒哀
則又要得剛剛則守得定不回進道
勇敢載則比他人自是勇處多
人ハ氣乃剛
を肝要と
て柔過まば志
立べし決断を利欲に迷ふ
なり又生質喜ぶも怒ることも
人ありて
乃めい剛をこころぐべし剛なる
心乃守る
くして物も回さる道をすむ
勇敢さなり載へ
他人より比すれば自
多し戲謔の
名あり
○戲謔不惟害
事志亦爲氣所流不戲謔亦是持氣
之一端
戲謔ハ事乃害
なるも氣は流
るるも輕浮
なるなり

心正する之始當
已乃心以て嚴
師と爲べ九動作
す所則懼る所
知此の如す一二
年守得て牢固
らば則自然心正
一矣

定て然後始光明
有若常は移易定
ま不何ぞ光明
を求人易は良
と以て止と爲止
乃光明なり故大
學定而より能慮

戲譚さるゝ氣を持ち
○正心之始當以已
心爲嚴師凡所動作則知所懼如此
一二年守得牢固則自然心正矣
正くもこの始は我心を嚴しと師家のごとく敬
まへる動作さるゝ懼まつゝと知るのよ
牢固もまた自然心正なり
○定然
後始有光明若常移易不定何求光
明易大抵以良爲止止乃光明故大
學定而至於能慮人心多則無由
光明
心定靜て始く光明づる常は物も移易
て定まつゝは光明の出るを求むもおよ

に至る人心多るべ
則光明は由無

動靜其時失は不
其道光明學者必
其動靜の時す
則其道乃蔽昧
不而明白今人學
は從ふ之久うて進
長と見不し正動靜
と識莫く以て他人
の擾るを見已
于事は非し而修
る所も亦廢す聖
學由之て觀ん冥

○動靜不失其時其道光明學
者必時其動靜則其道乃不蔽昧而
明白今人從學之久不見進長正以
莫識動靜見他人擾擾非干已事而
所脩亦廢由聖學觀之冥冥悠悠以
是終身謂之光明可乎
心乃動と靜ある
とつゝ終るの道光明なり學者動くべしとてハ動と
靜とをわきまをわきまの静と静とをわきまの静と
静とをわきまの静と静とをわきまの静と

悠々然乎是也
以て身を終ふ之
光明と謂ふ可
あらん乎

敦篤虚静者仁之
本輕妄者不仁
則是敦厚也繫
昏塞也所無
則是虚静也此
以頭悟之難
道於久須實
之之體也方
其味を知らん
夫

悠々然乎是也
以て身を終ふ之
光明と謂ふ可
あらん乎

敦篤虚静者仁之本不
輕妄則是敦厚也無所繫
昏塞則是虚静也此難以
頭悟苟知之須久
於道實體之方知其味
夫仁亦在乎
熟之而已
敦篤虚静ハ仁の本
と云ふ言と行
と云ふ心物の欲
は繫閑昏塞と云
ふを虚静といふ
は二つのあう
頃ハさうさう
若しもこ

仁も亦之を熟す
る乎在而已

仁も亦之を熟す
る乎在而已

近思錄餘師卷四終

